

研究・調査プロジェクト報告

本宗寺院における過疎対策、寺院活性化に向けた一考察

河崎 俊宏

現地調査報告

一、限界集落はこうして復活できる、活性化の進め方

↳ その発想と実行力から学ぶもの、活かさせるもの

石川県羽咋市 神子原地区

二、社会福祉法人 佛子園 真宗大谷派 西圓寺の事例

ソーシャル・インクルージョン

Social Inclusion 「社会的包括性」

石川県小松市 野田町

はじめに

前回、過疎PTが行った中央教研アンケートは、限定された中でのアンケート調査ではあったが、過疎地域寺院の現状とその問題点への対策を求める声を読み取ることができた。注目するべき点は、

過疎地域寺院にまだ発展の可能性はあると思うか（質問三）に対し、過疎地域寺院対策はまだまだ可能性はあるという教師が六五・二%と大半を占めるが、具体策に悩んでいる現状が伺えた。

次に、可能性や展望を見出すには何が必要か（質問四）に対しては、過疎地域寺院対策に関して教師の関心度は高く、地域ぐるみのイベント・催事という答えが五七・三%と社会や地域の公益性をも視野に入れた具体策が必要と考える教師が多い。

続いて、寺院活性化のために実際に工夫しおこなっているもの、試してみたいもの（質問五）という質問には答えの傾向が大きく別れた。

その特徴をあげると、

過疎地域寺院は活性化策を「より地域密着型」を策として考え、具体化し活性に努める傾向が強く、更なる具体策を模索している。

過疎地域以外寺院は、都市の寺院と地域住民との関わりという面で、檀家や地域の人々との関わりが希薄化し、これが大きな問題点として取られており、いかにして檀家に、そして地域住民にアプローチしていくのかという面で、地域にどう受け入れてもらえるのかという具体策を模索している傾向が強い。

最後に、地域社会との関わりが寺院活性化に繋がるか（質問六）に対しては、地域との関わりは重要であると答えた方は八五・四%にも及び、都市の寺院は地域との関わりを必要と感じるが、九〇・六%に及んだ。

この事から、過疎地域寺院対策には強い関心があり展望はあると感じているが、過疎地域寺院は様々な具体策を試みたり、思案している教師が多い。地域社会に対して公益性をも視野に入れたものを必要と感じ、傾向としては過疎地域寺院は「より地域密着型」を視野に入れ模索し、都市の寺院も多くの不安要因を抱え、寺檀の関係、人と人・寺と人との関わりの希薄化から、地域への働きかけなど、受け入れてもらう、認識してもらう為の策を必要と感じ、様々に模索している事が読み取れた。

これらを踏まえて、今回二か所の現地調査を行った。その選択は、

イ、地域密着型

ロ、社会・地域に受け入れられる意識改革

ハ、地域に必要とされる事

以上の面から二種類の違う分野ではあるが、その現状を調査し本宗寺院における過疎対策、寺院活性化に向けた一考察としたい。

現地調査報告（一）

「限界集落はこうして復活できる、活性化の進め方」

～その発想と実行力から学ぶもの、活かされるもの～

限界集落を救った一人の公務員 高野誠鮮氏

石川県羽咋市に限界集落神子原地区^{みこはら}がある。その限界集落を救った、地元羽咋市役所に勤める一人の公務員の取り組みが全国テレビに放送された。その公務員高野誠鮮氏^{たかのじょうせん}を訪れ、神子原地区^{みこはら}の例を取り上げ過疎地域寺院対策の一考としたい。

高野氏に対し、質問の要点を絞り込み以下の三つを柱とした。

- ・ 限界集落の原因と対策
- ・ 再生への手がかり
- ・ 過疎高齢化集落地域での寺院維持

高野氏のプロフィール

高野誠鮮氏

地元羽咋市に生まれ市役所に勤務、「ふるさと創生」国の施策の際、羽咋市をUFOの町としてUFO会館設立や実物のロケット、月面探査機を展示するなどユニモアな発想と実行力。後に農林水産課へ配属、そこで限界集落神子原地区の問題に直面、神子原を自活自立の方向へと地域住民の意識改革、奇想天外な発想力と実行力によってその集落は、若者が集まり、地域の人的活性と地元農作物のブランド化に成功。ついには限界集落を救う。政府の総務省地域力創造アドバイザーも務めている。(日蓮宗教師・石川県羽咋市太田町 妙法寺住職)

限界集落神子原地区について

神子原地区みこはら

石川県羽咋市神子原地区 石川県のほぼ中間 山間部集落 豪雪地帯人口五〇六人(一八年間で半減) 高齢化率五四%(平成一七年限界集落) 離村、離農率、耕作放棄増大(耕作面積一一〇ha 田八〇ha・畑三〇ha) 遊休地六ha

限界集落とは

限界集落

地域の六五歳以上の高齢化比率 五〇%以上 四九%自治体はイエローゾーン（六〇%村おさめ 島根県有名）

高野氏の限界集落に対しての姿勢

「会議を何千回続けても過疎は止まらない。報告書を何センチ厚いものをどれだけ作っても過疎は止まらない。コンサルタントを頼んで計画しても過疎は止まらない。」

そこで、限界集落を活性化する対策として不可欠なものは「原因」と「その対策」にある。

イ、対処療法と根本治療

原因探求とその対策としてなぜ過疎になるのかを考える

次に、活気を戻すためには最小単位で考えることが必要。

何をやるべきなのか、対策の為の資金・原資確保策を含めた総合的な戦略の必要性

ロ、プロジェクト推進と理念

基本的考え方の整理が必要「理念」・「戦略」と「実践」

実行できる実行システム

* 実行・実現できない計画（印刷物）や会議は不要

「理念」・「戦略」と実践について

存在論 ontology 人・町・市・県・国

理想論 究極の在り方として（人体・政治・経済）捉える

人体で譬えると血液は貨幣である、末端まで血液を流す

ホメオスタシス（行）

哲学 philo + sophia（愛 + 知恵）

物事を統一的に把握する理念の必要性

実践 理念が基礎となつて実践（行動）へと移行する

視観 地域・組織を一人の人間としてみる

地域・組織を一人の人間として捉える

地域社会・組織の理想は「人」として捉えることであり、「人体政治」・「人体経済」として見ることが理想
また一人の個が集まり家庭となる、その一つ一つの家庭の集まりが町や市を形成し、国となり地球・宇宙へ
と広がっていく。

大切なことは私たちの身体には「矛盾」「対立」「抗争」はないという事。例えば、右手と左手は争わず共存・共栄・協力し「全体」（身体）が栄える。痛みは全身に伝わり、常に元に戻そうと働くものであるということを認識しておくこと。

ハ、POST資本主義を人体から（理想論）

人類全体が一人の人体構造のように生きることができるのかが問われている。

一、人体経済学（血液・循環器系）

二、人体政治学（神経・伝達・命令系統）

三、人体組織学（骨格・部位・免疫）

*一人の人間の体で起きることは、「集落」「社会」「世界」でも必ず起こることであると認識する。

例、ワイトルウィウスの人体図古代ギリシャの世界観における小宇宙のコスモグラフィア (en:micocosmos)

メディアの活用について

二、メディアと大衆心理について

人の行動は「知る」(情報) ことから始まる、その為には情報の発信がなされて伝わり、人の心に響き、そして行動へと移行する。

情報の発信重要性

ビジビリティー(人はどうして靡くのか?)

メディアの効果

メディアの効果は、新聞・テレビの効果二週間で消滅

限界集落 神子原地区の例

なぜ神子原地区は、限界集落になったのかを原因追究していくことから始める

最小単位である 人として捉える

人の体の部位と捉える

例 左手が右手に比べ、痩せ細くなってきたとすると、二つ選択肢がある。

一つは、切断する方法と二つ目は、リハビリを行う方法。

*リハビリ運動によって血液の巡りがよくなる。その結果、栄養が運ばれ元に戻ろうとする。

*人間の体に起きることは村でも起きる

限界集落の場合、リハビリ運動は「交流」、血液は「貨幣」である。

求めるのは「お金」ではなく、運動「交流」であること。

一・五次産業創出へ

村人の離村の理由 第一に所得がない。

そこで、サラリーマン並みの所得を得られるようにしようと思案

農林漁業の最大の欠点

価格は市場任せであるという欠点、

自分で値段がつけられない、決められないという現状の壁。

そこで、村人の意識改革への取り組み

「自活」と「自立」自らが経営するという感覚を村人に。

例、農村からなぜ人が出ていくか、農業はお金にならない。

ではここを変えよう！

米や野菜の市場は誰が決める⇨市場が決める

一〇〇円かけて手間暇かけた大根を市場は三〇円で引き取っていく。

そこで、自分たちで価格を決めよう（意識改革へ）

「生産」・「管理」・「販売」を行う、自立自活への第一歩

「神子原の里」という会社を立ち上げる。

自信を持たせる

市役所で三年間、高野氏が神子原の米を販売

農家に自信を持たせる（マイナス思考からの脱却）

年間八〇〇〇万円売り上、農家目の色が変わってくる。

月一〇万、三〇万の売り上げ、一品から二品、三品へと意欲が増す

孫に小遣い、楽しみが生まれる。

コンバイン、トラクターと新車が増えてくる

段々と賑やかな過疎の集落へと変化

賛成・反対・無関心といった意識が段々と変わってきた。

活性化に向けた、その他の取組み例

空き農地・空き家バンク制度

空き家と耕作放棄の土地をセットプランで貸出

都会住民に田舎でのスローライフを満喫してもらう。

この事は、副次的に都会住民との交流促進に繋がった。

セット価格は、賃料月額二万円

他県から三〇代の人達を受け入れる。

一一世帯・三二名が入ってきた。

大きな副産物

他県から入ってきた人達、この人たちが過疎活性化に向けた事業に際して中枢として活躍してくれ良き協力

者となってくれた。

閉鎖的農村地区の住民意識改革の取り組み（地域住民の意識改革）

烏帽子親農家制度

農業体験・農家体験生活をしてもらう

仮の親子関係を結び、農家を第二の故郷として民宿やホテルでは味わえない家族ぐるみの体験が出来る制度
女子大生を体験に受け入れる 東京農大・法政大（男子募集せず）

作業には役立たないが、この農村には一八年間子供が生まれていなかった集落に若者が集まる。

地域住民と、女子大生の共同作業が始まる、棚田の雛祭りなど

地域住民の意識の変革

これらの事から、地域住民に「受け入れる」という大きな意識の変革が表れた。

農家カフェ

都会の若い夫婦が空き農地・空き家バンク制度利用して、カフェ（喫茶店）を営業しはじめる。交流の場
都会の人たちへは、携帯が繋がらないという贅沢と発信

価値の付加価値

「量」から「質」へ、今は「空間」と「雰囲気」に

外国人をも受け入れるようになった過疎地域

外国人を二か月間地域で受け入れる。（ホームステイ）

日本語が全く話せない外国人ばかり

地域住民には、

日本語でよい・特別にしなくて良い・いつもの生活でよい。

これらは、地域住民に更なる変革が生まれることとなる。

地域住民は一人ひとりが、更に許容範囲が大きくなり、なんでもできるぞという自信にあふれてくる。

*神子原米のブランド化に向けて

当初、皇室への献上米として政官で働きかけるが、失敗。

続いて、バチカンのローマ法王への献上米としてアプローチ

法王へ直接手紙 神の子 神の子地区 米を献上

歴史上、日本からの米の献上 調査の結果 歴史上には記載なし

ローマ法王に日本からの米献上初めての事 お墨付きを頂く

子の米の献上を通してお互いの架け橋を

マスコミ、メディアでの報道

消費者関心を示し始める。

だが、こちらからは営業販売に動かず。

いよいよ消費者側が動きだす。消費者が声をあげる、求め探す。

デパート側から売らせてほしいとの要請を取り付ける。

数量の限定、ブランド化に向けての動き

*お米の管理を人工衛星で、品質管理と厳選の仕組み

お米のタンパク値を青・水色・緑・黄色・赤の五段階で人工衛星から品質管理をする。

高品質の青・水色だけのお米を「神子原米」として販売

黄色・赤の米は地元の農協へ

質がよく良いもの（青・水色）は少量しか取れない

消費者を絶対に裏切らない、ブランド米を維持するために作付け技術を統一化して、増産しない体制をとる。
*ブランド米、神子原米から日本酒をつくる仕組み

おいしい米からおいしいお酒をつくる

七二〇ml 一本 三三、六〇〇円 「客人」（まればと）

地酒造りにも工夫

一次発酵にワイン酵母を使用

なぜワイン酵母を使用するのは、飲んで頂く方々を日本のみならず、世界にも向けて発信し外国人にも親しまれるように。

通常の三倍時間をかけて発酵、年間二千本限定（ブランド化へ）

現在JAL太平洋線 エグゼクティブクラスの指定酒に

これらの取組みの結果

*農家の所得が増えた 例 米一俵一四〇〇〇円から四二〇〇〇円へ 三倍

（サラリーマンの平均年収四四〇万を一〇四俵で達成すること）

・大規模市場の流通体制から個別流通体制への切り替え

・年間六八〇〇万村に入るようになった

・農業をやってて良かったという声が聞かれるようになった

*UJターン現象を生む

・Uターン八名 Iターン一一家族三二人

・高齢化率（H一七・四）五七%から（H二〇・四）五一%へ

・夏と冬 大学生が集落合宿

*雇用の促進

・「株式会社神子原」一一人の雇用が生まれる

これらの結果を踏まえて、過疎地域活性化のキーワード

一、害虫駆除的発想はナンセンス

切り捨てはダメ

二次元的な思考ではなく、複雑系思考を用いる。

例、雑草の根っこ

二、未だに解決できてないということとは、

何が間違っているからである。だから何も変わっていない。

三、人を巻き込み、人を動かす

メディア戦略重要

例、ロツテガムCM 二億五千万

目から耳から心を動かす、よって人は買ってみようかなと思う、そして実際に買ってもらう。

*活用して常に揺さぶりかける仕掛けは必要

最後に高野氏に助言を求めた。

過疎地域での寺院活性化策、高野氏はどう思われるか質問

一、三つの選択

あってもなくてもいい寺院

あっては困る寺院

あってもらわなくては困る寺院

*住職・寺族が何をどう目指していくのが重要

二、対策・行動計画

何を自分たちはここでやるべきなのかを明確に。

*try & errorの繰り返しを

三、植物のように

発想の展開の源 植物からのヒントを貰う 植物の根

直線形ではなく、複雑系思考であらゆる方法を考える

*可能性は沢山 可能性の無視は最大の悪策

四、かつてその寺院は、地域にとつてとつても必要な寺院であつたはず。

平成の鎌倉 今の時代、山村集落にこそ布教を

*人が連れられ、人は来る。その人が行くから人が来る。

人が集まる寺づくりを基本に

五、掛け算的価値 何に何をかけるか

人×家族 ×会社 ×地球平和 ×生物保護

*何に掛けるかによって価値が出る 寺×？（？×寺）

まとめ

過疎地域寺院の活性化は、地域を活性化してこそ、寺院が活性化する

寺院の価値を大きなもの× 大きな価値が生まれる。

今回の研究例会発表は、過疎PTとして課題を策定し「地域密着型」「社会・地域に受け入れられる意識改革」「地域に必要とされる事」という観点から神子原地区現地調査を行い、高野氏からその発想と実行力に学ばせて頂いた。深く心より高野氏へ御礼申し上げます。

合掌

現地調査報告（二）

社会福祉法人 佛子園

真宗大谷派 西圓寺 事例（石川県小松市）

～Social Inclusion ソーシャル・インクルージョン「社会包括性」～

今回の現地調査

石川県小松市野田町地区 西圓寺

北陸は浄土真宗王国の土壌

西圓寺は一四七三年創設 浄土真宗（真宗大谷派）直参道場

五三〇年以上の歴史 加賀藩の豪商とも縁深い寺であった。

二〇〇〇～三〇〇年前に加賀市より小松市の現在の地に移築

真宗大谷派の古刹として有名

西圓寺のある野田町地区

この地域野田町地区は五九世帯 二一〇人

西圓寺近年の状況

平成十七年住職遷化

お寺はお化け屋敷状態になっていた。

本堂屋根裏・境内地内にもゴミの山

住職がごみを集め供養と称して境内地ごみの山に。

お寺が、地域の厄介もの的存在へ

門徒離れ、そのような中で門徒離団が続く。最終的には三〜四件に

門徒、町内会が寺の存続・今後を話し合い

寺の今後を門徒・町役員会で幾度も協議を重ねる

寺の現状から、後継者決まらず。

廃寺の方向へ

社会福祉法人 佛子園が相談を受ける

お寺としてでなく、社会福祉法人として再出発

「障害者の参画」「地域の協力」を条件に地域の

コミュニティー施設として再興の道を歩み始める。

お寺平成十八年宗教法人解散

平成十八年九月 土地・建物を寄贈（前任職夫人より）

平成十九年三月 工事着工

平成二十年一月 三草二木 西圓寺 オープン

三草二木 西圓寺（社会福祉法人）へいたる背景

佛子園は知的障害を持った方への自活を目指した社会福祉法人
平成十七年 佛子園本部（白山市北安田町）近所の空き家を買収し自活訓練の為の施設を目指す。

佛子園本部のある地域近隣住民からの反対運動

「家の横に來られては困る」

*個別の対応や働きがけには限界がある、地域全体を変えていかななくては、「特別」な関係を「日常」へと。地域住民の意識変化が第一である。この失敗を繰り返さない。地域住民との連携協力・賛同参画を重要視。

三草二木 西圓寺での取組みと目的

Social inclusion ソーシャル・インクルージョン 「社会的包括性」

西欧で近年社会福祉の再編にあたり、その基調とされる理念

（対 ソーシャル・イクスクルージョン 「社会的疎外」

障害者・貧困者・失業者・ホームレス等社会的孤立しやすい立場、社会的に排除される可能性のあるマイノリティを社会的つながりの中に内包し、再び社会の構成員として支えあうことを目標とする公的扶助・職業訓練・就労機会など提供し総合的に実施

三草二木西圓寺から始まる町おこし

西圓寺から町ごと変える 西圓寺から地域へ発信

地域住民改革 お互いが理解しあえる地域を目指す。

高齢者も 子供も 障害者も

地域住民への理解を深めて頂き打為に境内地に温泉を掘り当てる。

温泉という効果

温泉の利用 地域住民全世帯利用は無料

地域住民の憩いの場 喫茶店（カフェ） 営業

西圓寺の役割

高齢者 ワークシエア（働く場） 漬物 梅干し 味噌

デイサービスの利用

憩いの場

子供 遊び場

駄菓子屋（本堂内） 営業

障害者 働く場（就労継続支援B型）

生活介護の利用

ボランティア 圏域住民

一般温泉利用客の受け入れ

施設見学者の受け入れ

* 「三草二木 西圓寺」は多機能施設へ

就労継続支援B型（二〇名）

デイサービス施設及び温泉施設管理が授産

カフェ・環境整備（特に温泉清掃）

味噌・漬物製造など

生活介護（定員六名）

高齢者デイサービス（定員一〇名）

昼食 釜炊きごはん・目で楽しむ食事

入浴 天然温泉による入浴

各講座を開設 外部の専門講師を招いて趣味の講座などを開設

地域住民との「共生」をなした背景

*西圓寺はもともと地域のお寺

地域に根差した地域住民との繋がりの中であつたお寺であつた。

つまり地域の核となつていた。

地域住民のそれぞれの思いが宗教法人から離れても今でも詰まっていたことが大きい。旧お寺を利用しての地

域住民との関係で大きな評価

地域の中での家々との繋がりが、地域住民同士の繋がりが強い地域

地域住民として、受け入れられると良き方向へ。身内になると力強い。

温泉効果は大きい

温泉は湧けば町が一つになる 絶大な集客力となる。

最後に「三草二木 西圓寺」の理念を紹介

あなたも町づくり 地域づくりの担い手に、一人一人が持ち味を発揮し、共に支えあうという「三草二木」の理念のもと、地域の皆さんと障害ある人たちが共に働き、協力しながらより良い明日の地域づくりに貢献します。

以上二か所の現地調査報告を研究例会での発表といたします。